

2021. 7. 11 (日) マタイ26:17~19

26:17 さて、種なしパンの祭りの最初の日に、弟子たちがイエスのところに来て言った。

「過越の食事をなさるのに、どこに用意をしましょうか。」

26:18 イエスは言われた。「都に入り、これこれの人のところに行って言いなさい。『わたしの時が近づいた。あなたのところで弟子たちと一緒に過越を祝いたい、と先生が言っております。』」

26:19 弟子たちはイエスが命じられたとおりにして、過越の用意をした。

<説教>

十二弟子の一人であるイスカリオテのユダがイエスをユダヤ人の祭司長たちに引き渡す(すなわち裏切る)取引をしたことを先主日に見ました(26:14-16)

そのときからユダはイエスを引き渡す機会を狙うようになりました(16)

祭司長たちや民の長老たちはユダからの情報、連絡を今か今かと待ち構えることになりました。

とは言え、ユダはイエスを引き渡す機会がいつになるかわからず、祭司長たちもいつイエスを引き渡してもらえるのかわかっていませんでした。

しかしイエスご自身はご自身が十字架につけられるために引き渡されるか、その時を知っておられました。

それは過越の祭りのときでした(2)。

それがイエスの父なる神のお定めになった時であり、御子イエスが御父に完全にお従いになったことでした。

イエスが十字架につけられ殺される、その前に引き渡されるということ、これらすべては祭司長たちやユダの思わくによって進んでいたものではありません。

そのことはどこまでも御父のご計画と御子の全き従順によって、すなわち神の主権によって進められていたのです。

過越の祭りのときに、しかも弟子たちと〈過越の食事〉(17)をした後で十字架につけられるために引き渡されること、それが主権者であられるイエスの御意思(みこころ)でした。

過越の食事の席でイエスが「わたしは、苦しみを受ける前に、あなたがたと一緒にこの過越の食事をするのを、切に願っていました。」と弟子たちに言われたことがルカの福音書(22:15)には記されています。

十字架につけられるために引き渡され、苦しみを受ける前に、十字架で死なれる前の〈過越の食事〉の席で、「主の聖晩餐」の制定がなされることにもなります。

〈さて、種なしパンの祭りの最初の日に…〉(17)とありますが、マルコは〈種なしパンの祭りの最初の日、すなわち、過越の子羊を屠る日〉(マルコ 14:12)と、ルカは〈過越の子羊が屠られる、種なしパンの祭りの日〉(ルカ 22:7)とそれぞれ記しています。

「過越の食事をなさるのに、どこに用意をしましょうか。」(17)とイエスに尋ねた弟子たちもこの日イエスのみことばに従って〈都に入り〉(18)子羊を屠ったことでしょう。

弟子たちの問いに対して、

〈イエスは言われた。「都に入り、これこれの人のところに行って言いなさい。『わたしの時が近づいた。あなたのところで弟子たちと一緒に過越を祝いたい、と先生が言っております。』〉 (18)

〈これこれの人〉とは、マルコヤルカ（の福音書）によれば、弟子たちが都に入って出会う（水がめを運んでいる人）が入って行く家の主人のことですが、マタイはそのような事には触れていません。

そしてマルコヤルカが触れていないイエスの言葉として、〈わたしの時が近づいた〉という言葉を記しています。

〈わたしの時〉とは、〈十字架につけられるために引き渡される〉時、〈苦しみを受ける〉時、十字架につけられて殺される時に違いありません。

このときの弟子たちも〈これこれの人〉もイエスの苦しみと十字架の死をはっきりと意識し受け入れていたとは思えません（復活のイエスに出会って後に分かりました）。

しかしイエスのご自身が〈世の罪を取り除く神の子羊〉（ヨハネ 1:29）として十字架上で血を流して死なれ、ご自身を神にお捧げになる真の「〈過越〉の子羊」として父なる神からこの世に遣わされたことを知っておられ、その道をまっすぐに進んでおられ、その〈時〉を目指しておられたのです。

かつて出エジプトの夜、神はイスラエルの民に、家ごとに傷のない一歳の子羊を屠ってその家の門柱と鴨居に塗り、またその子羊の肉を種なしパンと苦菜を添えて食べるようにお命じになりました。

神はその子羊の血が塗られた家を過越して、エジプトにお下しになった災いからイスラエルの民をお救いになり、エジプトの支配からお救いになりました。

その神の救いのみわざを思い起こし、記念するのが〈過越〉の祭りでした。

そうやって〈過越〉の祭りが千数百年来行われ、数え切れない子羊がそのたびに殺され血を流して来たのですが、それは「影、象徴」であり、その「実体、本体」は〈世の罪を取り除く神の子羊〉として十字架につけられるために引き渡され死なれるイエスだったのです。

〈キリストの血によって義と認められ…この方によって神の怒りから救われる〉（ローマ 5:9）のであり、〈御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださる〉（Iヨハネ 1:7）のです。

ですから、あのおとき（もまた例年どおりに多くの子羊が殺されたのですが）イエスが最後の〈過越〉を行おう（欄外注）となさった(18)のは、単に「おきまり」のことはしたのではなく、十字架で死なれるご自身が〈過越〉の完成者、完結者、成就者だと示すためだったのです。

そして、そのイエスの十字架の死は単なる犠牲でもありません。

それは〈自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため〉（Iペテロ 2:24）であり、〈死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するため〉（ヘブル 2:14,15）でした。

ですから、「わたしの時が近づいた」とはイエスが引き渡されて十字架で死なれるだけの〈時〉ではありません。

イエスこそが悪魔と罪と死に対する唯一人の勝利者であること、私たち人間を悪魔と罪と死の支配から救ってくださる唯一人の救い主であることが明らかになる〈時〉なのです。

更には〈自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われ〉(ピリピ 2:8)、父なる神によって復活させられた〈イエスの名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが膝をかがめ、すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白して、父なる神に栄光を帰する〉(ピリピ 2:10,11)その〈時〉までも望み見ておられました。

そのようにしてイエスは最後の〈**過越の食事**〉に向かわれたのです。